

平成26(2014)年度  
授業評価アンケート  
分析報告書

平成28年3月  
國學院大學

## 授業評価アンケート分析報告書の刊行に際して

國學院大學教育開発センター委員会 委員長

柴崎 和夫

大学に様々な役割が期待されていることは、今も昔も変わっていない。だが果たして本当に大学はその期待に答えているのか。現在では問われることが普通になった。もちろん、そう問われたら、大学には答える責務がある。また少子化が進行するなかで、どの大学も、高校生に選ばれる大学になるべく必死に頑張っているのが実情であろう。けれども、何時の時代も大学の評価は、卒業生の評価でなされることに変わりはない。ただ、現代ではその卒業生がどのような資質の学生であり、どのような知識・技能を修得したかを、世間にあらかじめ示す（あるいは宣言する）ことが要請されている。それに答えることは、結局のところ大学の最も重要な役割である多面的な視点を持った人材の育成、が鍵となるという平凡な事実に行き着くであろう。先の見えにくい現代では、さまざまな情報・知識を基に、自らの力で物事が判断できるような能力を身に着けさせ、未知の事柄にも対応できる学生、自律性があり自ら学び続けることができる学生を社会に送り出すことが大切となる。このような視点に立てば、大学教員に求められることは明白になる。良質な授業を如何に学生に提供できるかである。

それでは良質の授業とはどのような授業なのか。理想的にはワクワクして受講でき、関連する事項を主体的に調べ、活発に討論できるようになる授業といえる。しかしながら、全てを前記のような授業にするわけにもいかないのも現実である。また、学生からの評価が著しく低い授業も少なからずあることも確かである。教員が担当する授業を学生たちがどのように感じているかを知り、積極的に授業改善を図るためには「授業評価アンケート」はやはり不可欠で、アンケート結果は教員個人だけでなく、大学全体、学部・学科が組織として積極的に利用すべき重要な情報といえる。どの大学でも教員相互でお互いの授業を聴講・評価するような機会はほとんど無い。自分の授業の良し悪しを他の教員に評価される経験を持たない教員が大多数であろう。授業評価アンケートでの評価が高い授業、および評価が著しい低い授業の担当教員の模擬授業を所属する教員全員の参加のもとで行い、意見を忌憚なく出し合うことが可能になればアンケートを行っている意味もある。

本学では様々な情報を公開することとなっている。この分析報告書も大学のホームページを通して公開するので、担当教員だけでなく、学生や保護者、一般の人も閲覧が可能である。この分析報告書を読み、お気づきになったことがあれば、ぜひ、教育開発センター委員会にご連絡いただきたい。また、本分析報告の刊行に際してご尽力いただいた教職員の方たちには、厚く御礼を申し上げます。

## はじめに

教育開発センター

本報告書は、平成 26 (2014) 年度に実施した「学生による授業評価アンケート」の結果について集計・分析を行ったものである。「全体分析編」「学部・学科・諸課程別分析編」「経年分析編」の三編で構成され、全編において集計・分析を一括して委託業者に依頼し、各学部教育開発センター委員及び教育開発推進機構において内容確認を行った。以下、調査概要とその結果の一部を解説する。

### 〔1〕 調査概要

本学授業評価アンケートは、本学学生の授業に対する取組の実態を把握し、授業改善の基礎資料とすること、さらには基礎資料の活用により教員に自らの授業運営を振り返る機会を提供することで、学修効果を改善させ、本学学士課程教育の質保証を達成することを目的に、平成 17 年度から毎年度前期・後期の 2 回実施されている。

平成 26 年度は前期が 6 月 23 日 (月) から 7 月 22 日 (火)、後期が 12 月 8 日 (月) から 1 月 27 日 (火) の期間にアンケートを実施した。開講科目数をベースにみた実施率は前期が 78.1%、後期が 73.7% である。一方で履修者数をベースにみた回答率は、前期が 56.2%、後期が 52.5% となっている。詳細な数字は本報告書 8 ページを御覧頂きたい。なお例年通り履修者数が 10 人未満の少人数授業では、アンケートを実施していない。

平成 24 年度に設問及び用紙のレイアウトが大幅に改訂され、平成 25 年度もレイアウトの小幅改訂を実施したが、平成 26 年度は一切の改訂を行わず、前年度の形式をすべて踏襲した。したがってアンケートは引き続き紙媒体の形式で実施され、多肢選択と自由記述から構成されている。多肢選択の設問は、全 9 問の全学共通設問と、学部別設問や授業担当教員が自由に設問を設定する部分とで構成されており、自由記述の設問は「この授業でとても良いと思ったこと」「この授業で改善した方が良かったこと」を記述してもらう形式である。各々の具体的な設問項目については、巻末に収録したアンケート用紙サンプルを御覧いただきたい。また、学部ごとに設問番号が異なることから、相互比較を行う際に設問番号の違いに注意が必要となる。この点については、p.6 に対照表を掲載しているので、適宜参照していただきたい。

なおアンケート実施の際に用紙の取り違えが生ずる可能性があった。そこで平成 25 年度と同様に、用紙それ自体の色をブルー (法学部)・グリーン (文学部)・オレンジ (人間開発学部)・白 (教養総合・経済学部・神道文化学部) の 4 種とし、かつ用紙の最上部に色名を白抜きで印刷した。

本報告書では全学共通設問 9 問分を中心としつつ、学部別設問についても集計及び他の設問項目との相関分析を行っている。以下の解説では紙幅の都合から、主に共通設問から見て取れる傾向について述べることとする。

### 〔2〕 分析の観点について

平成 18～21 年度実施分では「この授業を履修してよかったですか」との総合満足度を問う設問を主軸として分析を行い、平成 22～23 年度実施分では「この授業を理解できましたか」との全体理解度を問う設問を主軸として分析を行った。平成 24 年度実施分からは、全体理解度・総合満足度をともに考慮した分析としており、平成 26 年度は分析報告書の形式も含めて、前年度を踏襲している。

### 〔3〕 総評

#### ① 全体理解度・総合満足度の数値の推移 (p.12 参照)

全体理解度については、「かなりそう思う」「そう思う」のポジティブ回答の合計が 88.5% であった。とりわけ「かなりそう思う」が 35.2% であり、これは 5 年間を通じて最も高いポイントであった。他方で「あまりそう思

▼全体理解度（設問「この授業を理解できましたか」に対する回答）

	かなりそう思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
平成 22 年度	30.1%	55.2%	12.0%	2.8%
平成 23 年度	32.6%	55.5%	9.9%	2.1%
平成 24 年度	30.9%	55.8%	11.0%	2.2%
平成 25 年度	32.3%	55.5%	10.5%	1.8%
平成 26 年度	35.2%	53.3%	9.7%	1.7%

▼総合満足度（設問「この授業を履修して良かったですか」に対する回答）

	かなりそう思う	そう思う	あまりそう思わない	思わない
平成 22 年度	42.8%	47.9%	7.0%	2.4%
平成 23 年度	46.4%	45.7%	6.0%	1.9%
平成 24 年度	44.2%	47.0%	6.7%	2.0%
平成 25 年度	48.0%	43.8%	6.3%	1.9%
平成 26 年度	49.2%	42.9%	6.1%	1.8%

わかない」「思わない」のネガティブ回答の合計は、11.4%と5年間を通じて最も低いポイントであった。肯定回答と否定回答のポイント差が拡大していることから、学生の授業理解度は向上傾向にあるようである。

総合満足度については、「かなりそう思う」「そう思う」の合計が平成22年度以降90%以上を維持する傾向に変わりはなく、総じて良好な状況であるようである。全体理解度と総合満足度とには高い相関があるため、引き続き現状の満足度が維持されることが期待される。

②学生の意欲に関する数値の推移（p.12 参照）

▼学生の授業への意欲度（設問「予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか」に対する回答）と教員の意欲的な授業進行（設問「教員は意欲的に授業を進めていましたか」に対する回答）との比較

	学生の授業への意欲度			教員の意欲的な授業進行		
	かなりそう思う	そう思う	合計	かなりそう思う	そう思う	合計
平成 24 年度	21.7%	49.9%	71.6%	53.0%	43.3%	96.3%
平成 25 年度	24.6%	46.8%	71.4%	56.3%	40.4%	96.7%
平成 26 年度	27.0%	46.4%	73.4%	58.0%	39.0%	97.0%

平成24年度に設けられた、学生の授業に対する意欲度を問う設問（「予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか」）について、3年間のポジティブ回答の推移を上図左にまとめた。平成26年度は過去2年と比較して若干ではあるが、ポイントが上昇した。その意味では学生の授業への意欲度は、多少なりとも改善傾向にあるように推察される。だが p.8 の全体分析編で指摘したとおり、依然として「あまりそう思わない」「思わない」のネガティブ回答の合計は、約30%にもなる。これは他の設問項目のネガティブ回答と比較して著しく高いポイントであり、学生の授業への意欲度を向上させる継続的な取り組みを展開していく必要がある。

それと対になる教員の意欲的な授業進行を問う設問（「教員は意欲的に授業を進めていましたか」）についても、3年間のポジティブ回答の数値を上図右にまとめた。「かなりそう思う」「そう思う」の合計が例年90%を超えており、26年度も94.0%に達している。例年90%超というポジティブ回答がみられるのは、主張の控えめな学生

による「サービス」的な回答が一定程度含まれている可能性がある。だがそれを差し引いても、学生側としては、各教員がかなり意欲的に教育活動を行っているという印象を受けていることは確かであろう。しかし以上の数値からは、学生たちが教員の熱意を感じていながらも、学ぶ側の意欲がそれに呼応していないケースが存在することが推定される。何がそのような結果を引き起こしているのか、より詳細な観察と分析が必要となろう。

### ③全体理解度・総合満足度との相関分析 (pp.90-98 参照)

各項目の相関係数を通覧したところ、以下の特徴が見られた。

第一に、全学共通設問中、教員の授業について尋ねた「A.教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか」「B.板書や教材は理解の助けになりましたか」「C.教員は意欲的に授業を進めていましたか」については、AとB、AとCにおいて全学部で相関関係がみられた。他方でBとCとの間では文学部・法学部・神道文化学部よりも、経済学部と人間開発学部で若干ではあるが高い相関がみられた。

第二に、全学共通設問中、学生自身について尋ねた「D.シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか」「E.予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか」「F.この授業を理解できましたか」「G.授業のテーマへの関心が高まりましたか」「H.この授業を履修して良かったですか」については、FとGとHとの間で相関を確認できた。

p.8の全体講評でも指摘があるとおり、以上の分析結果からは、教員側からの働きかけと学生側における理解・満足・関心の高まりとの間には相関関係があることが理解できる。また、学生が教員の授業に対する意欲を認識する要素として、話や指示の明確さ、板書や教材の工夫の在り方が関係するであろうことが認識できる。したがって教員は、授業の技術的な面での改善・工夫が、学生が教員や授業に対して抱く印象に多少なりとも影響を及ぼすものであることを認識し、適切な授業運営を行うことが期待される。なお、このような関係性は、平成24・25年度の分析報告書でも程度の差こそあれ確認されており、授業運営の不断の改善が求められよう。

なお学部別設問における相関分析の結果に関しては94ページ以降を、全体理解度と全学共通設問とのクロス集計及びその集計結果を用いたコレスポネンデンス分析に関しては101ページに分析結果がまとめられている。

### ④クラス規模別評価 (pp.115-116 参照)

各設問項目の回答をクラス規模別(50名未満・50名以上100名未満・100名以上200名未満・200名以上300名未満・300名以上・全体)に集計している。平成25年度はほぼ全ての項目において、「かなりそう思う」と「そう思う」を合計した肯定回答の割合が、クラス規模が大きくなるに従って減少することが顕著に現れていたが、今年度は必ずしもそのような傾向とはならなかった。設問によっては300名以上の大規模授業の肯定回答の割合が、100名以上200名未満、200名以上300名未満のそれより大きいことが確認できる。なお出席状況に関してはクラス規模による差はほとんどない。

その他、「学部・学科・諸課程別分析編」「経年分析編」の分析については118ページ以降を御覧いただきたい。

## [4] 今後に向けて

先にも言及したが、本学では平成17年度より学生による授業評価アンケートを実施しており、本報告書の刊行で実施10年目を経過したことになる。この間、我が国の高等教育強環境は大きな変化を遂げており、とりわけ学士課程教育の質的転換が強く求められるようになった。今後は設問内容・分析方法・実施形態について積極的かつ抜本的な検討を行い、より充実した学生による授業評価アンケートを実施するとともに、その知見を学内で実施されている多様なFD活動と関連付け共有することで、本学学士課程教育の質的改善を図りたいと考える。

以上

巻頭言(授業評価アンケート分析報告書の刊行に際して)

はじめに.....	1
目次.....	4
前付:設問番号について.....	6
<b>全体分析編</b>	
全体講評.....	8
I. 回答者プロフィール.....	10
II. 授業アンケート集計.....	12
III. 学部(回答者所属)別構成比.....	13
IV_1. 全体理解度評価	
1. 開講場所・開講時期別.....	19
2. 学部(回答者所属学部)別.....	19
3. 学科(回答者所属学科)別.....	20
4. 学年別.....	21
5. クラス規模別.....	21
6. 科目(授業科目の区分別).....	22
IV_2. 総合満足度評価	
1. 開講場所・開講時期別.....	23
2. 学部(回答者所属学部)別.....	23
3. 学科(回答者所属学科)別.....	24
4. 学年別.....	25
5. クラス規模別.....	25
6. 科目(授業科目の区分別).....	26
V_1. 学部(回答者所属)別理解度評価	
1. クラス規模別.....	27
2. 時限別.....	28
3. 学年別.....	29
4. 曜日別.....	30
V_2. 学部(回答者所属)別満足度評価	
1. クラス規模別.....	31
2. 時限別.....	32
3. 学年別.....	33
4. 曜日別.....	34
VI. 学部別科目ベスト	
1. 理解度.....	35
2. 満足度.....	39
VII_1. クラス規模別科目集計一覧(理解度)	
・日本文学科必修/選択.....	43
・中国文学科必修/選択.....	45
・外国語文化学科必修/選択.....	46
・史学科必修/選択.....	47
・哲学科必修/選択.....	48
・法学部必修/選択.....	49
・経済学部必修/選択.....	51
・神道文化学部・専攻科必修/選択.....	53
・初等教育学科必修/選択.....	55

・健康体育学科必修／選択	56
・子ども支援学科必修／選択	57
・教養総合言語／講義／演習／実技	58
・教職課程	62
・図書館学課程	62
・博物館学課程	63
・社会教育主事課程	63
・別科必修	63
<b>VII_2. クラス規模別科目集計一覧(満足度)</b>	
・日本文学科必修／選択	64
・中国文学科必修／選択	66
・外国語文化学科必修／選択	67
・史学科必修／選択	68
・哲学科必修／選択	69
・法学部必修／選択	70
・経済学部必修／選択	72
・神道文化学部・専攻科必修／選択	74
・初等教育学科必修／選択	76
・健康体育学科必修／選択	77
・子ども支援学科必修／選択	78
・教養総合言語／講義／演習／実技	79
・教職課程	83
・図書館学課程	83
・博物館学課程	84
・社会教育主事課程	84
・別科必修	84
<b>VIII. 専任・兼任別順位</b>	
順位の算出方法	85
1. 理解度順位	86
2. 満足度順位	88
<b>IX. 相関係数(学部別)</b>	90
<b>X. 科目区分別 平均値・最高値・最低値</b>	99
<b>XI_1. 理解度からみた各項目の評価(項目間クロス集計・コレスポンデンス分析)</b>	101
<b>XI_2. 満足度からみた各項目の評価(項目間クロス集計・コレスポンデンス分析)</b>	108
<b>XII. クラス規模別評価</b>	115
<b>学部・学科・諸課程別分析編</b>	118
<b>経年分析編</b>	
I. 授業アンケート集計	131
II_1. 全体理解度評価	
1. 学科(回答者所属学科)別	132
2. 学年別	133
3. 学部(回答者所属学部)・学年別	134
II_2. 総合満足度評価	
1. 学科(回答者所属学科)別	136
2. 学年別	137
3. 学部(回答者所属学部)・学年別	138

## 前付：設問番号について

平成26年度実施分は、全学共通設問・学部独自設問ともに、平成25年度から設問内容の変更はない。また、学部独自設問の違いによって、アンケート用紙を4種類用意する点も変更はない。平成25年度で行った、回答のしやすさを考慮した設問の配列を改定も、そのまま継承している。

設問の配列は、設問内容が全学共通なのか学部独自なのかにかかわらず、その内容が「授業について」か「学生自身について」かの2つに分類している。これにより、全学共通設問であっても、用紙の種類によって異なる設問番号が振られている。

本報告書では、設問を示す際に冗長さと混乱を避けるため、アンケート用紙に表示されている設問番号ではなく、下表のとおり統一した番号を用いる。全学共通設問は、調査票の設問順にアルファベット「A」から付番した。ただし「この授業にどの程度出席しましたか」については、質問のタイプが他とは異なるため、全学共通設問の中での末尾「J」とした。以降「J」から、学部独自設問を用紙色グリーン、ブルー、オレンジの順に付番した。

設 問		用紙色と設問番号				報告書 設問番号	学部別質問項目 での補足	(参考) H24年度 番号
		白 <small>教養総合、 経済学部、 神道文化学部</small>	グリーン <small>文学部</small>	ブルー <small>法学部</small>	オレンジ <small>人間開発 学部</small>			
授業 について	教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか	Q 1				問A		Q4
	板書や教材は理解の助けになりましたか	Q 2				問B		Q5
	教員は意欲的に授業を進めていましたか	Q 3				問C		Q6
	他の履修学生は、この授業にまじめに取り組んでいましたか	—	Q 4	—	—	問J	グリーンのQ4	Q11
あなた 自身 について	この授業にどの程度出席しましたか	Q 4	Q 5	Q 4	Q 4	問I		Q 1
	授業の内容はシラバスに沿っていましたか	—	—	Q 5	—	問L	ブルーのQ5	Q11
	シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか	Q 5	Q 6	Q 6	Q 5	問D		Q 2
	予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか	Q 6	Q 7	Q 7	Q 6	問E		Q3
	この授業を理解できましたか	Q 7	Q 8	Q 8	Q 7	問F		Q 7
	授業のテーマへの関心が高まりましたか	Q 8	Q 9	Q 9	Q 8	問G		Q 8
	この授業を履修して良かったですか	Q 9	Q 10	Q 10	Q 9	問H		Q 9
	あなたは、質問をするなどして担当教員と積極的にコミュニケーションをとりましたか	—	Q 11	—	—	問K	グリーンのQ11	Q 10
	この授業について、授業時間外に週平均でどのくらい勉強しましたか	—	—	Q 11	—	問M	ブルーのQ11	Q 10
	この授業を受けて、知識や能力が増大したと思いますか	—	—	Q 12	—	問N	ブルーのQ12	Q 11
	この授業に関する教科書以外の本を何冊読みましたか	—	—	—	Q 10	問O	オレンジのQ10	Q 10
	この授業は指導者の資質を備える上で役に立ったと思いますか	—	—	—	Q 11	問P	オレンジのQ11	Q 11
	この授業は将来の自分の生き方を考える上で役に立ったと思いますか	—	—	—	Q 12	問Q	オレンジのQ12	Q 12
**** (設問なし)	Q 10 ~Q 12	Q 12	—	—				
教員 指示	自由設問欄①②	Q 13、Q 14						

- ・「—」は、その用紙色では設問が設けられていないことを示す。
- ・平成24年度のアンケート用紙では、全学共通設問の後に学部独自設問を配している。

# 全体分析編

## 全体講評

平成24年度から3年にわたり、基本集計と、「全体理解度」「総合満足度」の2軸を中心とした集計・分析、項目間クロス集計とコレスポネンス分析を利用した、理解度・満足度に影響する要因の抽出を行った。これにより、改善へ向けての提言をまとめている。

### 調査目的

本学学生の授業に関する意識・状況を把握し、今後の授業改善のための基礎資料とする。  
また、この基礎資料を活用することにより、授業の学修効果の向上及び「教育の質保証」の維持を狙う。

### 実施概要

#### アンケート実施の前期／後期バランスについて

「Ⅰ. 回答者プロフィール」での開講時期の割合は、前期48.9%:後期41.4%。やや前期に集中している状態は、前年度(49.3%:39.9%)と変わっていない。

科目数については、前期／後期ほぼ同数であり(下記表参照)、実施率・回答率ともに、前期の割合がやや高い。

	前期	後期
科目数	2,167	2,220
実施科目数	1,693	1,636
実施率	78.1%	73.7%

履修者数	116,691	107,201
回答数	65,579	56,297
回答率	56.2%	52.5%

### 授業評価結果に影響を与える要素と、授業改善につながる提言

#### 学生の授業への意欲度について

「Ⅱ. 授業アンケート集計」において、問E「授業への意欲度」(予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか)は、他の項目と比べて著しく低い。この項目が理解度・満足度の結果と直結していることは、「XI.1.理解度からみた各項目の評価」、「XI.2.満足度からみた各項目の評価」における項目間クロス集計からも明らかである。

学生の主体的な学びを促し、その意欲を高めるために、学修時間や学修行動、学修成果との相互関係も含めた視点で、効果的な具体策を検討する必要がある。

#### 各評価指標にクラス規模が及ぼす影響について

「全体理解度」と「総合満足度」は、クラス規模「50名未満」が最も高く、クラス規模が大きくなると低下する。この傾向は、全学共通設問をクラス規模別に集計した「XII. クラス規模別評価」においても、また、問D「シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか」を除く全ての設問でも同様であった。

クラス規模を可能な限り50名未満に抑える一方で、大規模クラスだが理解度や満足度が高い科目について、その要因をさぐり他に展開することや、科目属性(講義か演習か、教養か専門か、など)の違いを踏まえた改善点を模索することは、学修効果の向上に有効な施策を講じることにつながる。

#### 相関関係について

全設問間の相関をまとめた「IX. 相関係数(学部別)」では、全ての学部で、問A「教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか」、問B「板書や教材は理解の助けになりましたか」、問C「教員は意欲的に授業を進めていましたか」、問F「この授業を理解できましたか」、問G「授業のテーマへの関心が高まりましたか」、問H「この授業を履修して良かったですか」の項目間に、それぞれやや高い相関がみられた。このことから、教員の働きかけ(問A・問B・問C)と授業効果(問F・問G・問H)の関係性の強さが見て取れる。授業改善を考える際には、この点に留意すべきである。

また、特に高い相関がみられたのは、授業効果を示す問F・問G・問Hの項目間である。「理解→関心度向上→満足」という密接な関係が証明された。これは、「IX. 相関係数(学部別)」のほか、「学部・学科・諸課程別分析編」においても、はっきりと読み取ることができる。

## 理解度・満足度からみた各項目の評価（項目間クロス集計）について

「XI\_1.理解度からみた各項目の評価」と「XI\_2.満足度からみた各項目の評価」では、項目間クロス集計に加え、項目間の影響度をより定量的・視覚的に把握するために、コレスポンデンス分析を用いて各項目と理解度・満足度の関係性を分析した。授業評価の結果(効果)に対して、「理解できた／できなかった」「満足できた／できなかった」などの、下記のような関係性が明らかになった。

理解度・満足度が高い層は、教員の働きかけ(指示、板書、意欲)に対して、強い関係性がある。

理解度・満足度が低い層は、教員の働きかけとの関係性は弱い。

理解度と満足度、また、それらと授業への意欲や授業テーマへの関心の高まりは、強い関係性がある。

詳細は XI\_1「理解度からみた各項目の評価」、XI\_2「満足度からみた各項目の評価」を参照のこと。

## 改善へ向けたアプローチについて

授業評価アンケートを数年にわたり実施して得られた知見を元に、さらなる展開に向けた組織的なアプローチが必要である。(注1)

### ・学生の取り組み(予習・復習)の改善

①取り組み状況と理解度・満足度の関係性を学生に積極的に公表する

②学生の主体的な学びを促し、意欲を高めるための施策を検討する

文学部独自設問によれば、教員と学生間のコミュニケーションと学修意欲は、他の設問と比較して相対的に相関が高いことがわかった。K-TeaDにより教員からアンケート結果をフィードバックすることや、オフィスアワーなどを利用した双方向コミュニケーションに、更に取り組むべきである。

### ・大学の取り組み(課題や工夫の共有、改革サイクルの確立)の改善

①経年分析の視点を残しつつ、改善効果が高い施策を探るために調査票を改定する

②学生の学修時間や学修行動の把握により、学修時間を増やすための施策を具体化

③能動的学修(アクティブ・ラーニング)の、効果的なカリキュラムへの組み込み

④蓄積されている授業評価アンケートの教員コメントや、ティーチング・ポートフォリオを、クラス規模や授業形態(講義・演習・実習等)、対象(学部・教養・専門等)別に検索可能とし、改善ヒント集とする。

### ・教員の取り組み(話し方、板書、意欲)の改善

①教員相互の授業参観

②アクティブ・ラーニングを推進するためのワークショップ、または授業検討会

「意欲的に授業を進める」を中心に、総じて教員の取り組みに対する評価は高い。相対的に評価がやや低い「講義の聞き取りやすさ」「板書や教材の工夫」については、改善の余地がある。教員の職能開発に関する施策についても、さらに検討すべきである。

(注1)「大学における教育内容等の改革状況等について(平成25年度)」平成27年9月10日 文部科学省高等教育局 大学振興課大学改革推進室

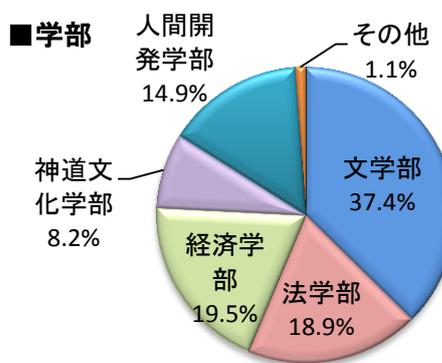
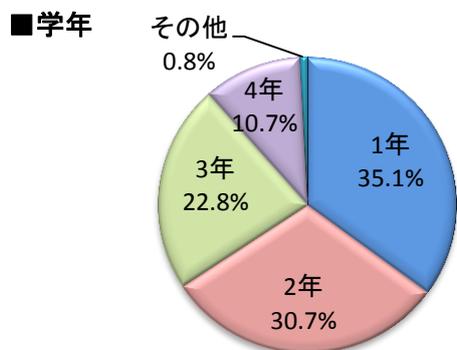
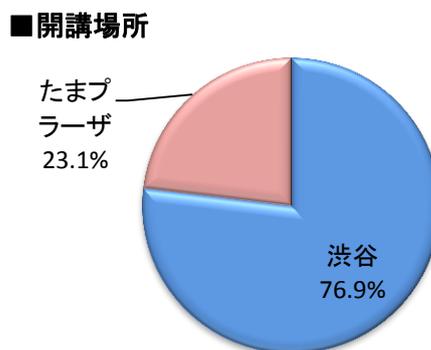
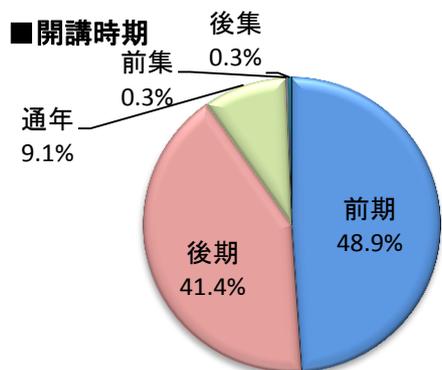
・調査対象は、国公立大学771大学。回答率99%(762大学が回答)。

・「今後の課題と考えられる事項の例」として挙げられているのが、「大学教育の質的転換」と「教職員の質向上」である。

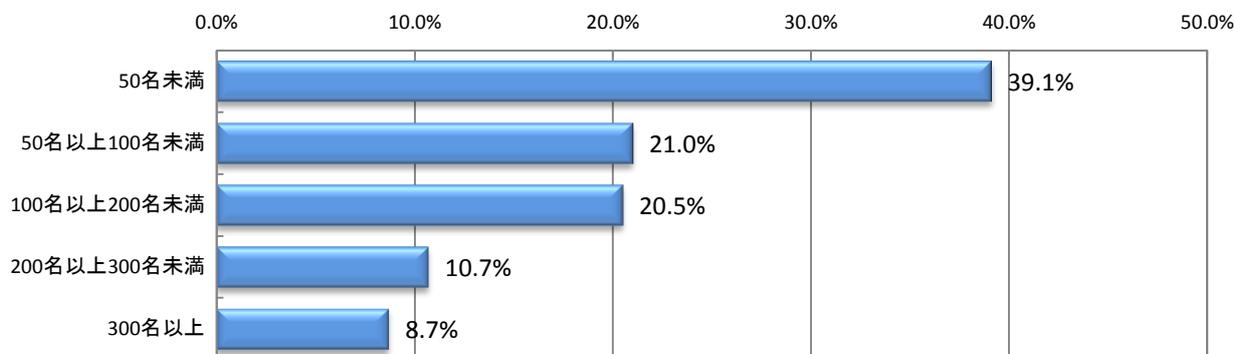
・学位授与の方針(DP)、教育課程編成・実施の方針(CP)、入学者受入れの方針(AP)に関して、実際の大学教育との整合性が問われている(DP、CP、APは、94%を超える大学で定めている。一方で、大学全体で定める人材養成目的や学位授与の方針等とカリキュラムの整合性を考慮する大学は約74%)。

・大学教育の質的転換のために、教員の職能開発(FD)が重要であり、大学設置基準において、各大学における実施が定められているが、教員のFDへの参加率は依然として低い状況(教員全員が参加した大学は約13%、4分の3以上の教員が参加した大学は約37%)である。

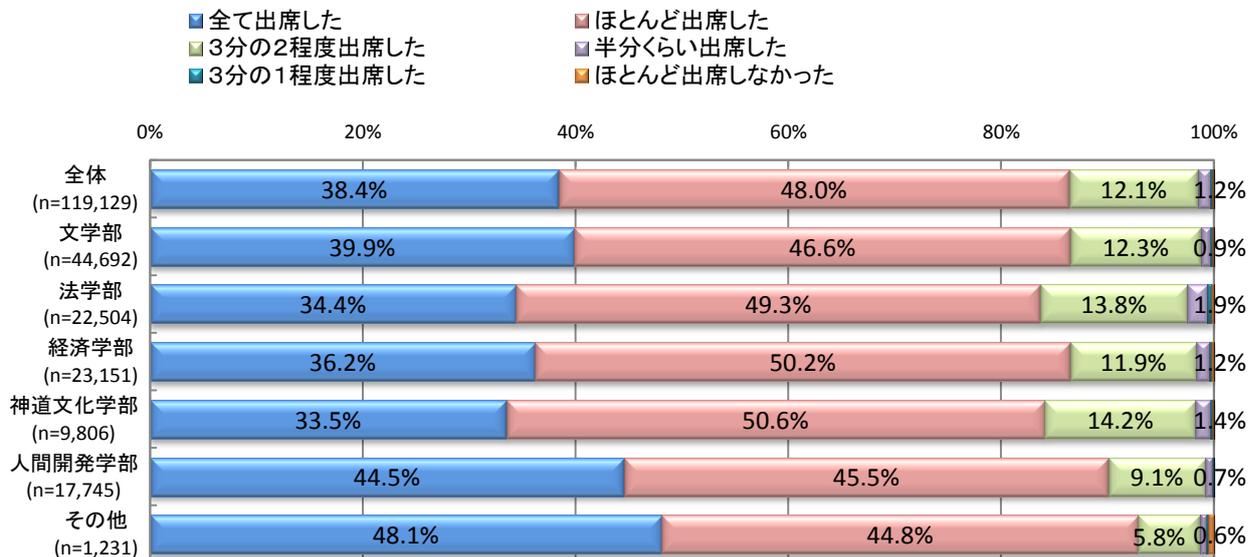
# I. 回答者プロフィール



## ■クラス規模



## ■出席状況



■開講時期

各開講時期の全体的なバランスは、前年度とほぼ変わらない。

■開講場所

前年度に続き、「たまプラーザ」は微増。

■学年

全体的なバランスは、前年度と同様である。

■学部

「人間開発学部」が、前年度に引き続き2.4ポイント増。

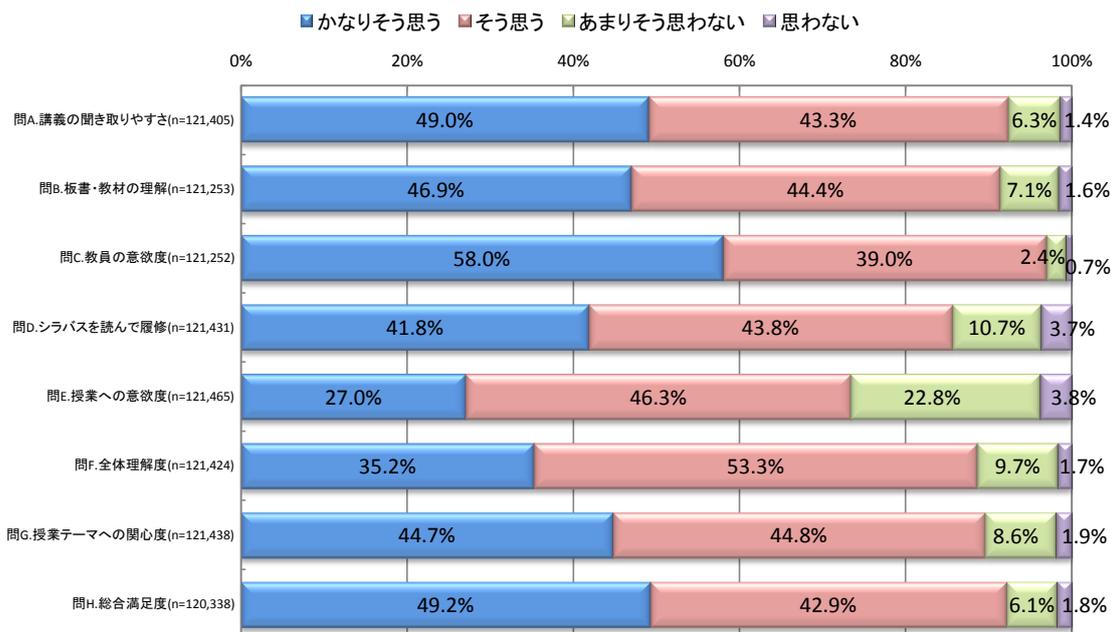
■クラス規模

50名未満と300名以上で、微増。

■出席状況

「全て出席した」は、全体で0.2ポイントの微増。

## Ⅱ. 授業アンケート集計



全学共通設問について、集計した。

調査票前半にある教員の働きかけに関する設問(問A～問C)は、後半にある学生自身に関する設問(問D～問H)と比較してスコアが高く、「そう思う(計)」「かなりそう思う」+「そう思う」、以下同じ)の上位項目を占めている。「そう思う(計)」が90%を超える項目は、「教員の意欲度」(97.0%、前年比+0.3)、「講義の聞き取りやすさ」(92.3%、+0.5)、「総合満足度」(92.1%、+0.3)、「板書教材の理解」(91.3%、+0.8)である。

全体として、教員の授業努力や、熱意・意欲は学生に高く評価されていると考えられる。これらの項目では、「そう思う」「あまりそう思わない」層を、「かなりそう思う」へ引き上げることが課題の一つとなる。

一方、学生自身に関する設問の中でも、「問E. 授業への意欲度」(予習・復習をするなど授業に意欲的に取り組みましたか)のスコアは著しく低い。これは、この設問が設けられた平成24年度から続く傾向である。

事前準備・授業受講・事後展開をとおして、学習から学修へと学生の意識を変え、主体的・能動的な学びを引き出すための具体的な施策について、引き続き検討が必要である。

※各学部独自に設定した設問の集計結果については、「Ⅲ. 学部(回答者所属)別構成比」を参照のこと

### Ⅲ. 学部（回答者所属）別構成比

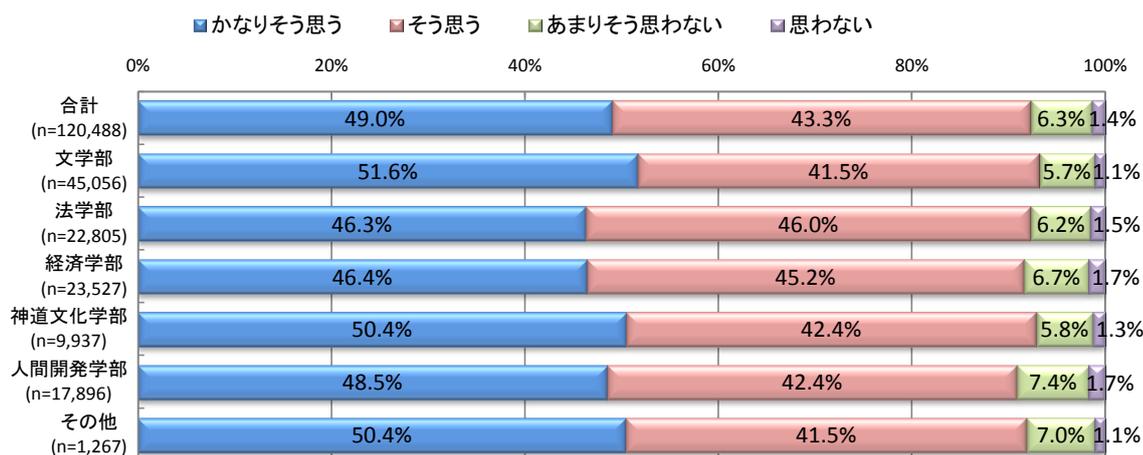
#### 1. 共通設問への回答集計

共通する各設問(問A～問H)について、学部別に集計した。

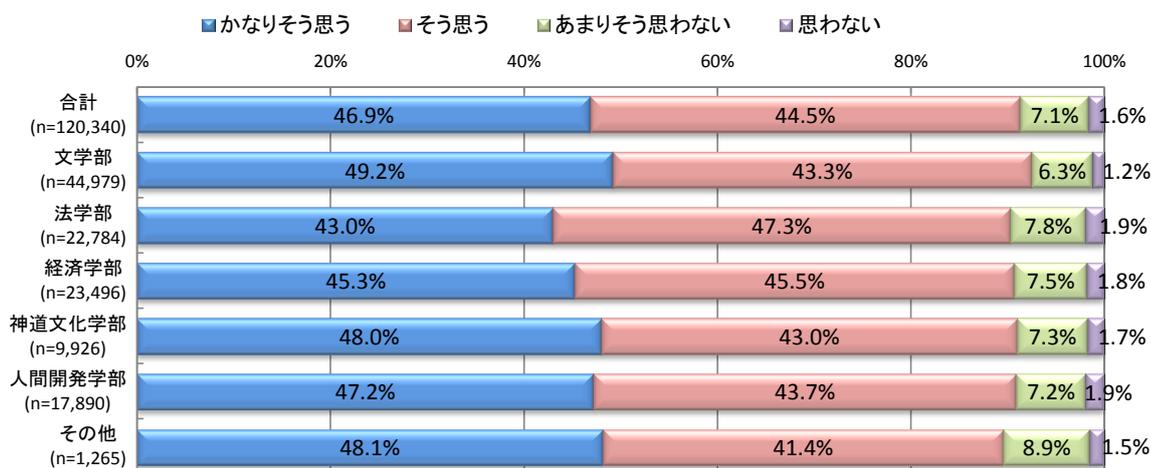
「そう思う(計)」は、問D「シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか」を除き、学部による有意差はみられなかった。問Dでは、人間開発学部だけが、他の学部と比べ低い結果となった。

これは、コースを決めると必然的に履修すべき科目が決まるという人間開発学部の特性によるものと思われる。ただしこれは、平成23年度から続く傾向であり、改善の余地がないか検討する必要がある。

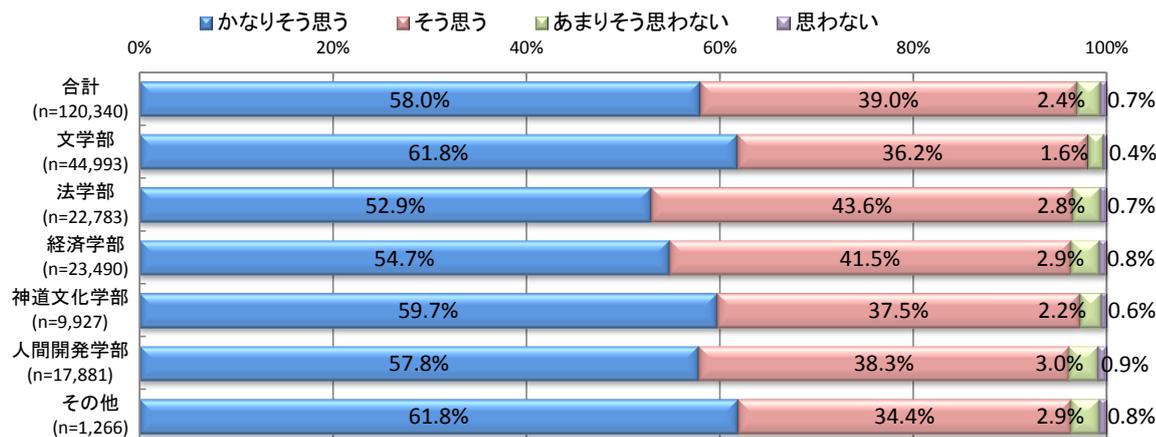
#### 問A. 教員の話や指示は明確で聞き取りやすかったですか



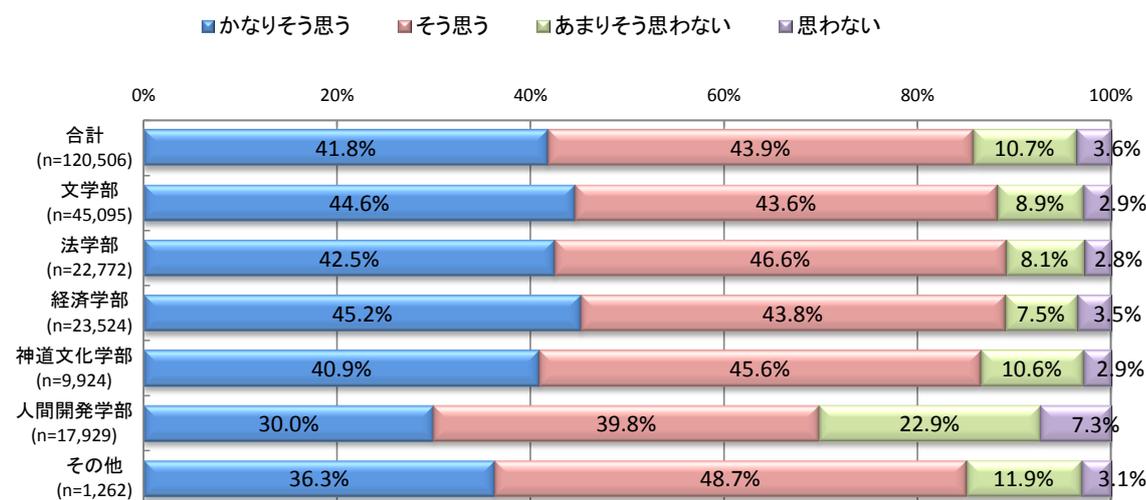
#### 問B. 板書や教材は理解の助けになりましたか



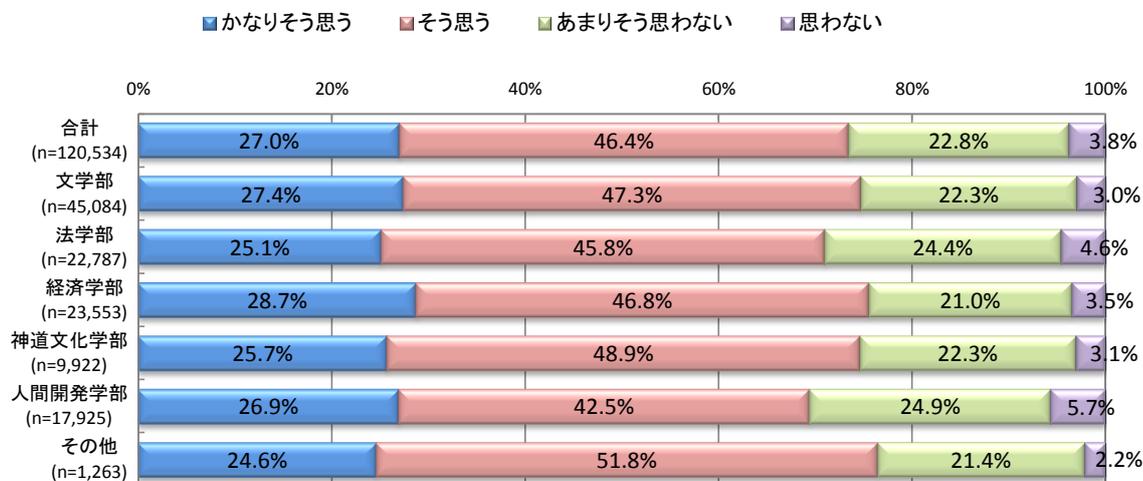
### 問C. 教員は意欲的に授業を進めていましたか



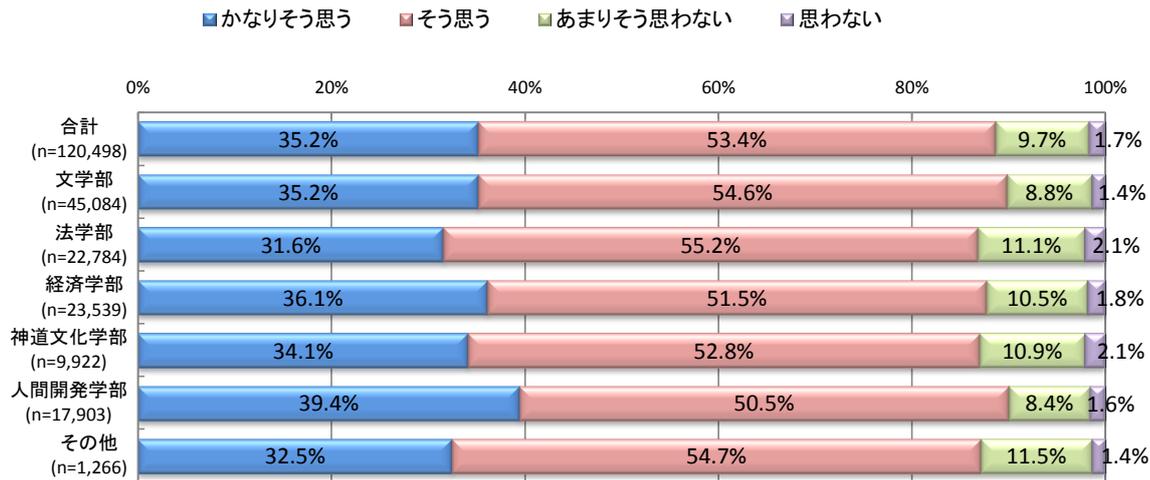
### 問D. シラバスをよく読んでこの授業を履修しましたか



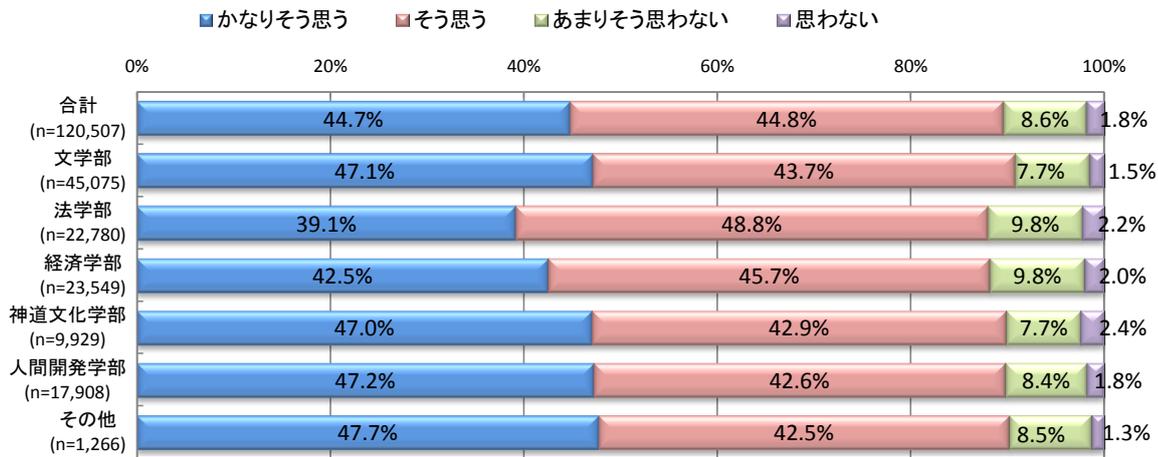
### 問E. 予習・復習するなど授業に意欲的に取り組みましたか



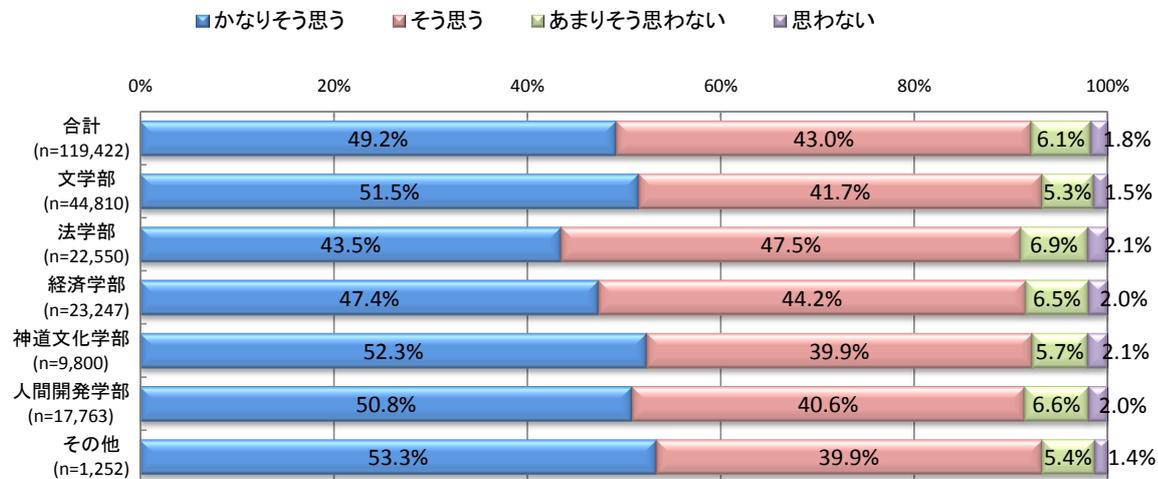
### 問F.この授業を理解できましたか



### 問G.授業のテーマへの関心が高まりましたか



### 問H.この授業を履修して良かったですか



## 2. 学部別設問への回答集計

学部別の設問について、全体(全回答者)・該当学部・その他(該当学部以外)別に集計した。

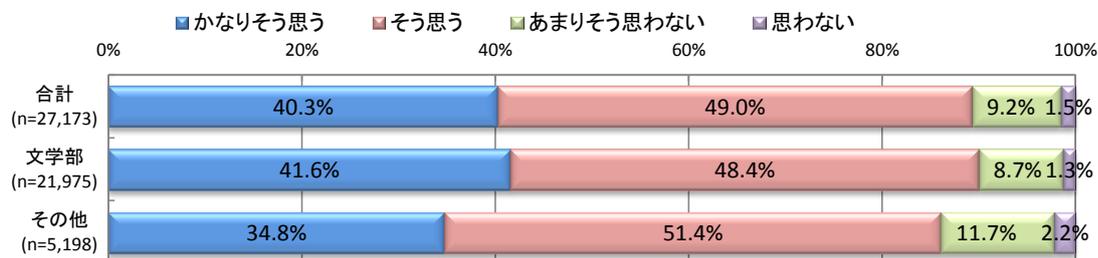
文学部:用紙色グリーン

法学部:用紙色ブルー

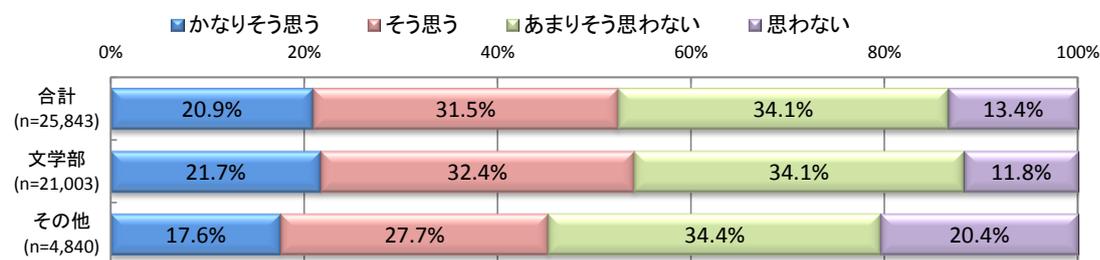
人間開発学部:用紙色オレンジ

### ①文学部設問(用紙色グリーン)

#### 問J.他の履修学生は、この授業にまじめに取り組んでいましたか(グリーンQ4.)



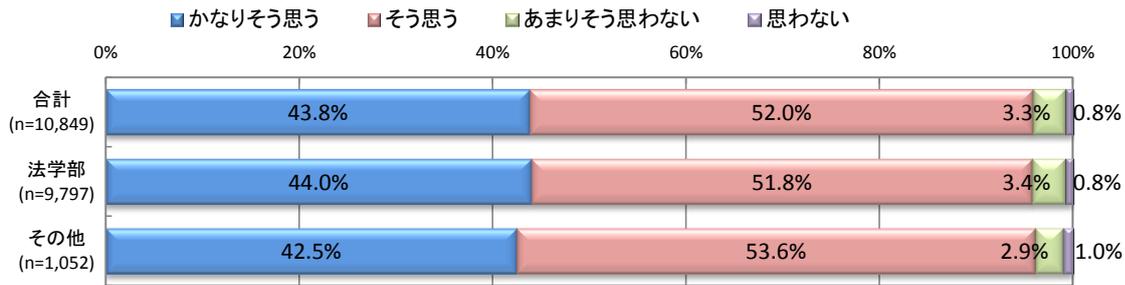
#### 問K.担当教員と積極的にコミュニケーションをとりましたか(グリーンQ11.)



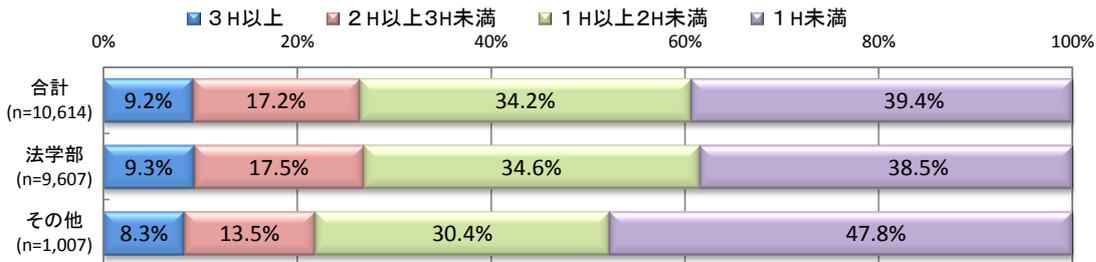
文学部設問の問K「担当教員と積極的にコミュニケーションをとりましたか」において、文学部の学生で「そう思う(計)」と回答した学生は、約半数の54.1%であった。

②法学部設問（用紙色ブルー）

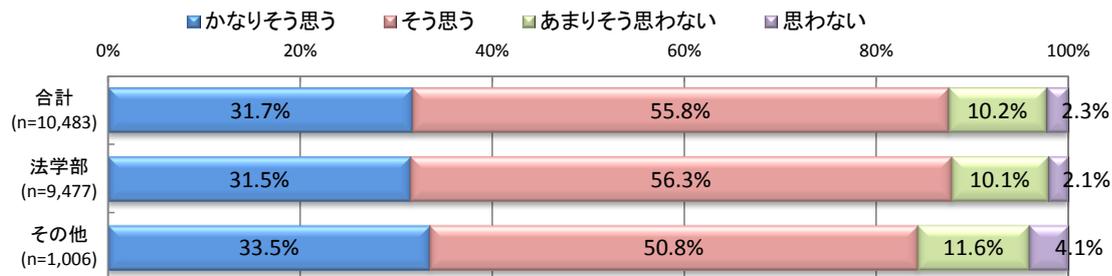
問L.授業の内容はシラバスに沿っていましたか（ブルーQ5）



問M.この授業について、授業時間外に週平均でどのくらい勉強しましたか（ブルーQ11）



問N.この授業を受けて、知識や能力が増大したと思いますか（ブルーQ12）

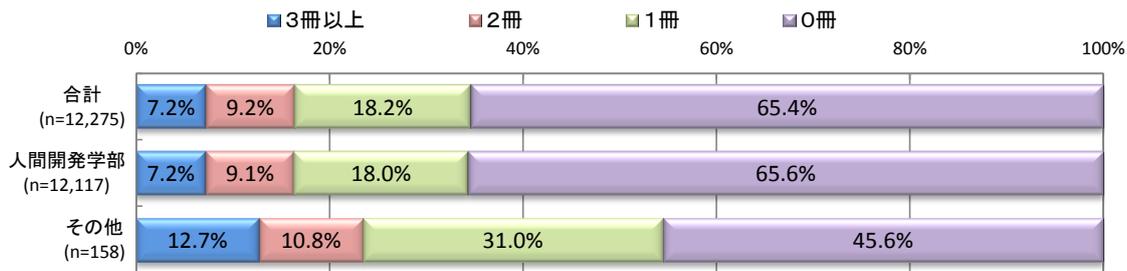


法学部設問の間Mにおいて、法学部の学生で、授業時間外の週平均学修時間が「1時間未満」は、38.5%存在する。

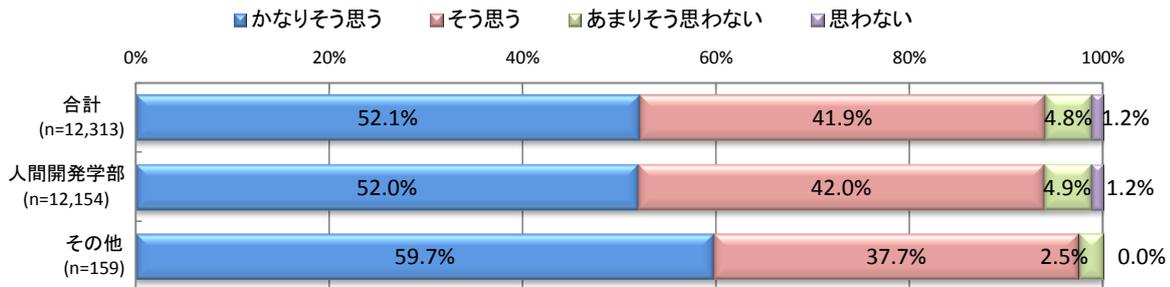
問Nにおいて、法学部の学生が、授業によって知識や能力が増大したと感じる割合は、「そう思う(計)」で87.8%と高い。

③人間開発学部設問（用紙色オレンジ）

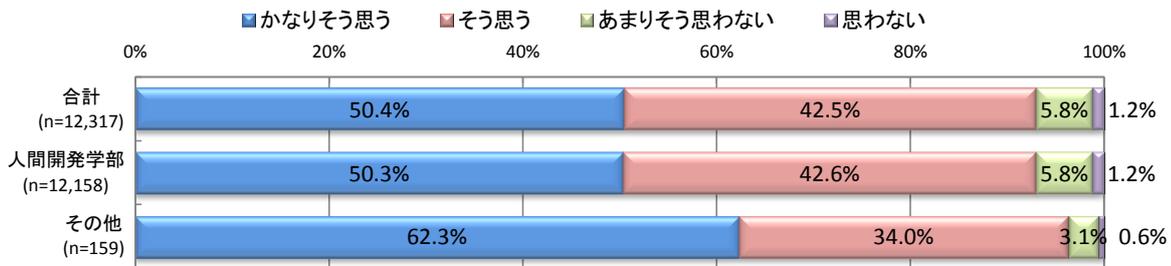
問O.この授業に関する教科書以外の本を何冊読みましたか（オレンジQ10）



問P.この授業は指導者の資質を備える上で役に立ったと思いますか（オレンジQ11）



問Q.この授業は将来の自分の生き方を考える上で役に立ったと思いますか（オレンジQ12）



人間開発学部設問の問Oにおいて、授業に関する教科書以外の読書を全く行っていない人間開発学部の学生は、65.6%存在する。

問P、問Qにおいて、人間開発学部の学生が、「授業が有益である」「将来の生き方を考える上で役に立った」と感じる割合は、いずれも「そう思う(計)」で90%を超えており、高い割合を示している。

## IV\_1. 全体理解度評価（問F. この授業を理解できましたか）

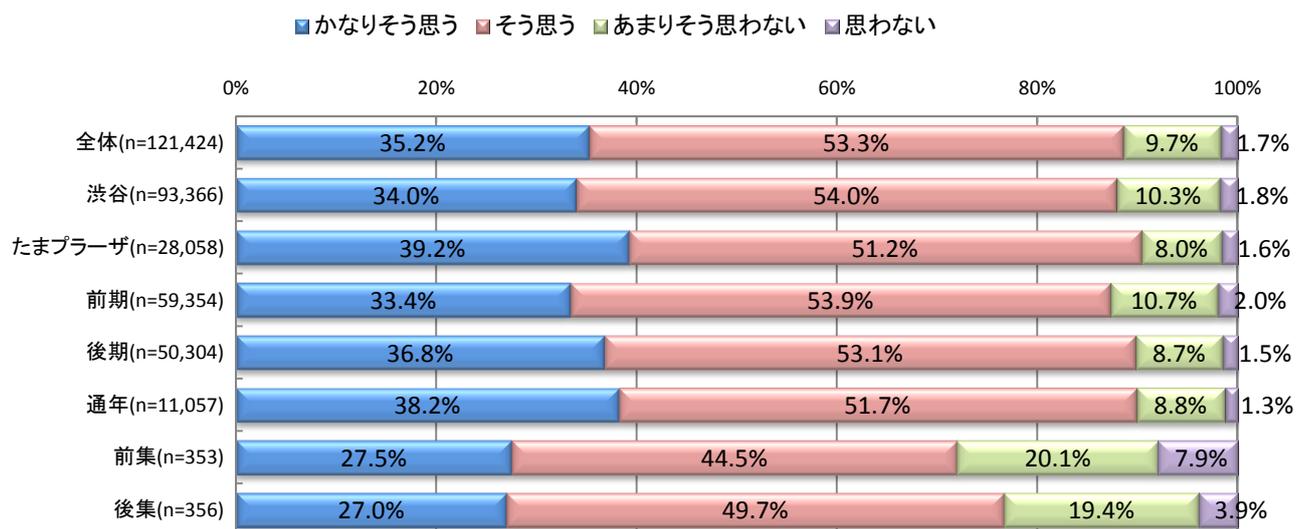
全体理解度を基軸として、回答者プロフィール（開講場所、開講時期、学部、学科、学年、クラス規模）と、授業科目の区分とのクロス集計を行った。

全体理解度（問F）について、「そう思う（計）」は全体で、88.5%（前年比+0.7）であった。

### 1. 開講場所・開講時期別

開講キャンパスによる、有意な差はみられなかった。

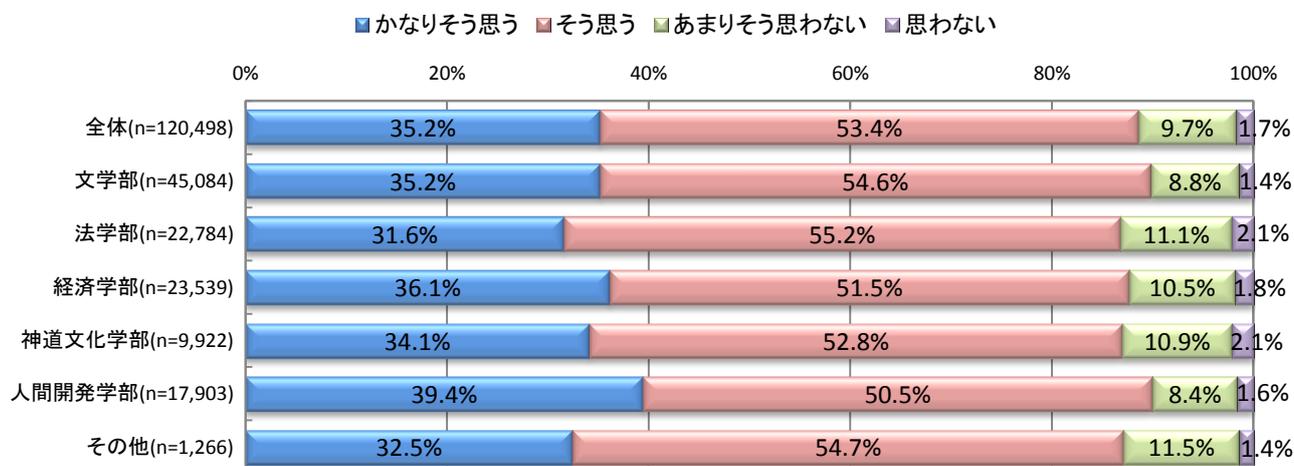
開講時期別では、半期科目及び通年科目はいずれも「そう思う（計）」が約90%であり、こちらも大きな差異はみられなかった。一方、半期集中科目は、前期・後期ともに70%前後とスコアが低かった。半期集中科目は、集中的な学修を意図して週2コマ半期集中で開講されているため、入試方式の多様化による理解力の差や教授法の差、他の履修科目との兼ね合い（授業外学修時間を十分に確保ができたか）など、さまざまな影響を受けやすいといえる。



### 2. 学部（回答者所属学部）別

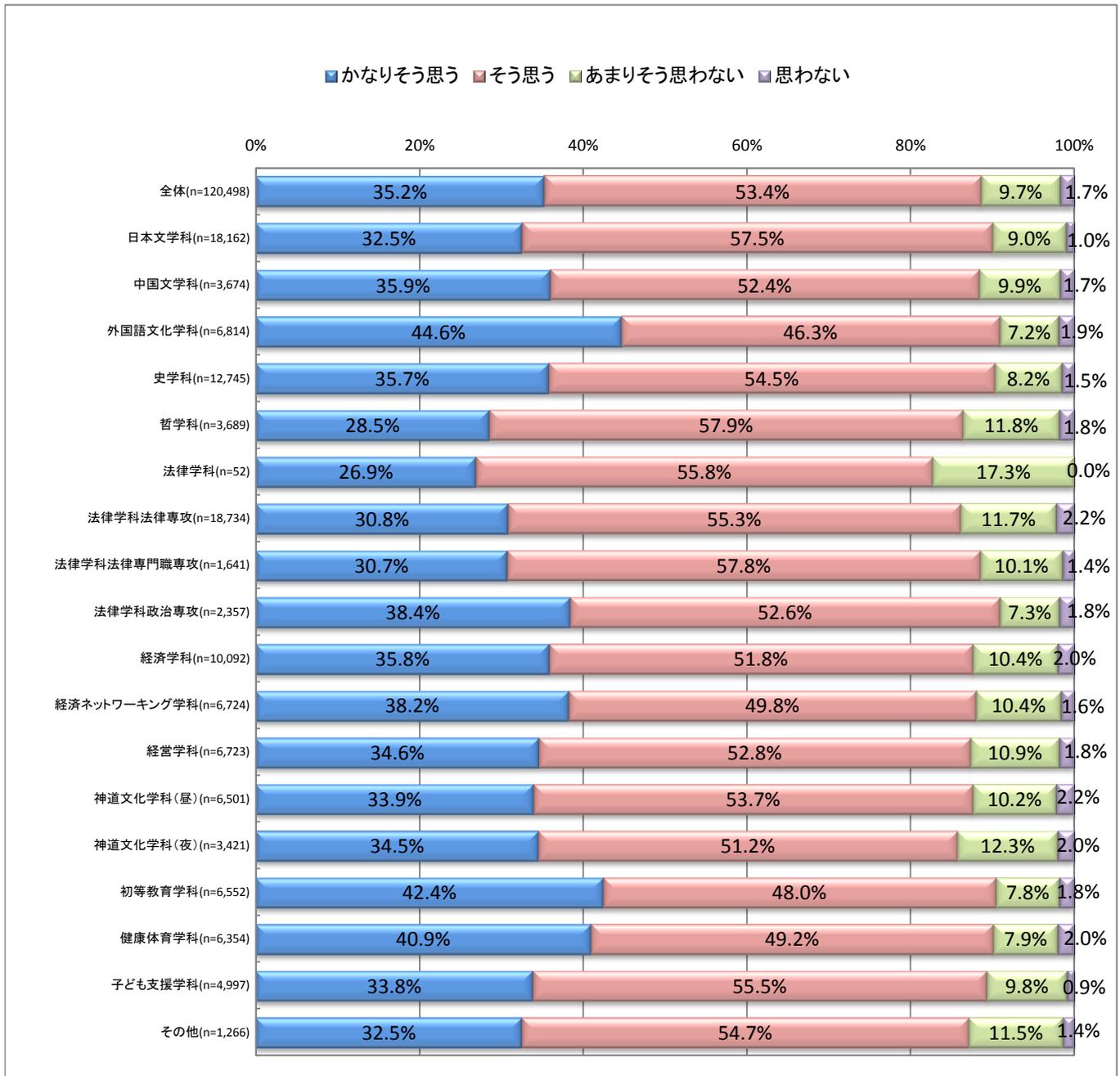
全体理解度（問F）について、学部による大きな差異はみられなかった。

全ての学部で、「そう思う（計）」が85%以上であった。



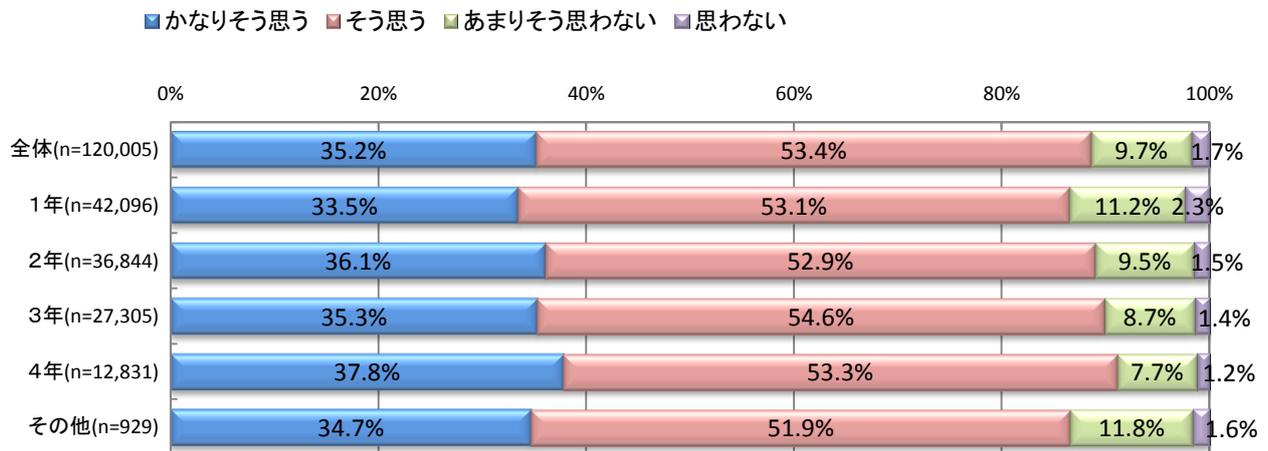
### 3. 学科（回答者所属学科）別

全体理解度(問F)について、学科別に集計した。「そう思う(計)」の結果には大きな差はなかったが、「かなり  
 そう思う」の割合は、学科によりややばらつきがみられる。



#### 4. 学年別

全体理解度(問F)について、学年別に集計した。「そう思う(計)」は「4年生」が91.1%と最も高く、「1年生」が86.6%と最も低かった。学年による大きな差異はみられないが、学年が進むにつれ、理解度はやや上昇する傾向にある。

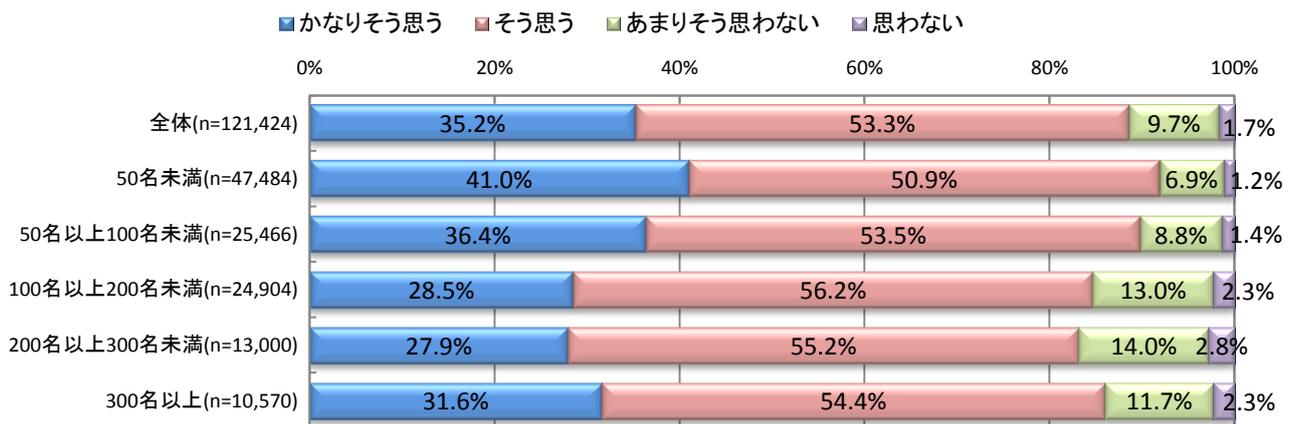


#### 5. クラス規模別

全体理解度(問F)について、クラス規模別に集計した。

「そう思う(計)」が91.9%と、最も高い割合を示しているのは、「50名未満」のクラス規模であった。これは、平成23年度から続く傾向である。

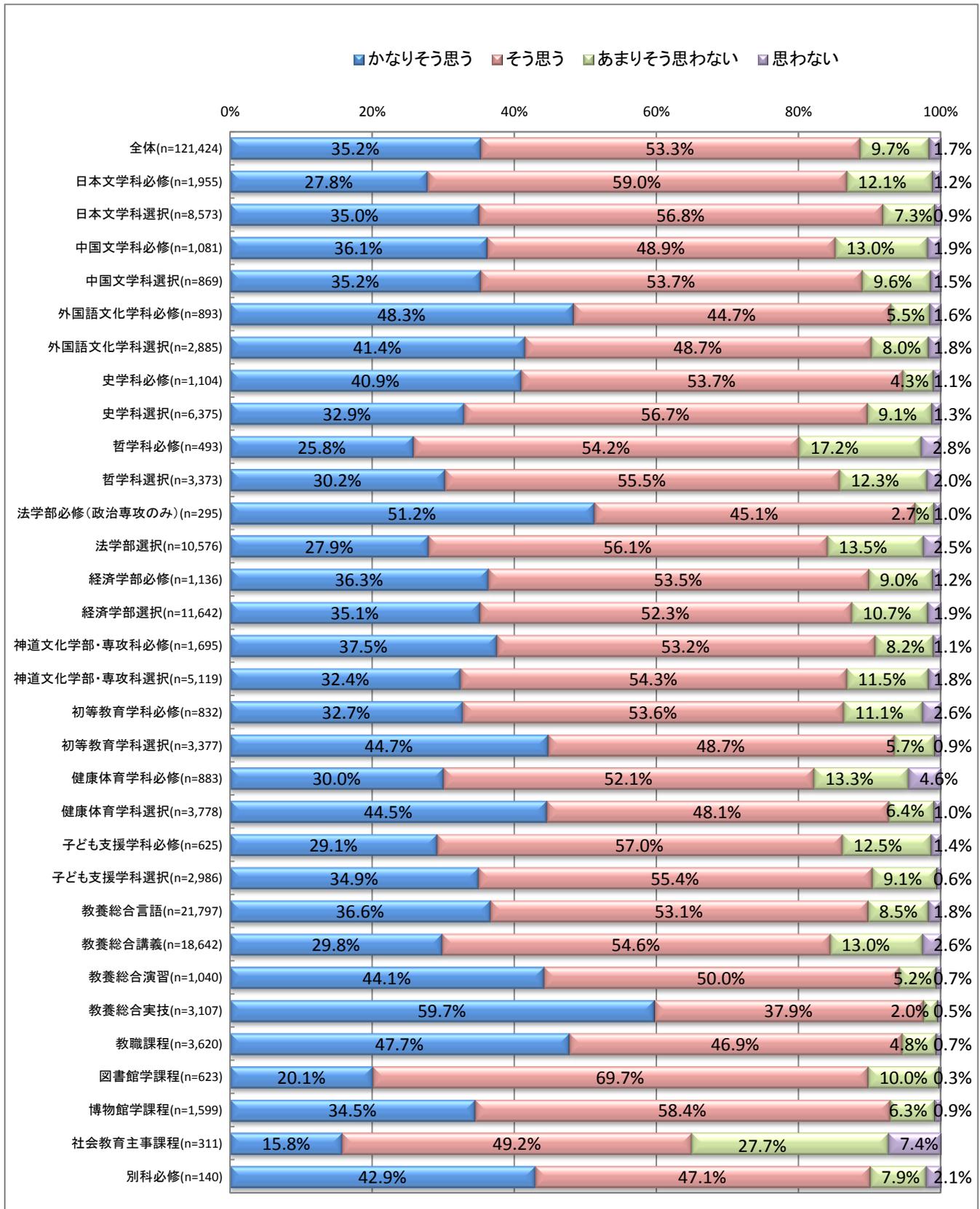
クラス規模が大きくなるにつれ、理解度は下がる傾向にあるが、「50名以上100名未満」では、全体とほぼ同じ割合となり、クラス規模が100名を超えると横ばいとなっている。また、300名を境にやや上昇している。



## 6. 科目（授業科目の区分）別

全体理解度(問F)について、授業科目の区分別に集計した。「そう思う(計)」が、最も高い科目「教養総合実技」(97.6%)と、最も低い科目「社会教育主事課程」(65.0%)の差は、32.6ポイントである。「かなりそう思う」が50%を超えて特に高い理解度を示しているのは、「教養総合実技」と「法学部必修(政治専攻のみ)」の2科目であった。

科目によって理解度のばらつきが生じており、全般的に前年度と同じ傾向がみられる。



## IV\_2. 総合満足度評価（問H. この授業を履修して良かったですか）

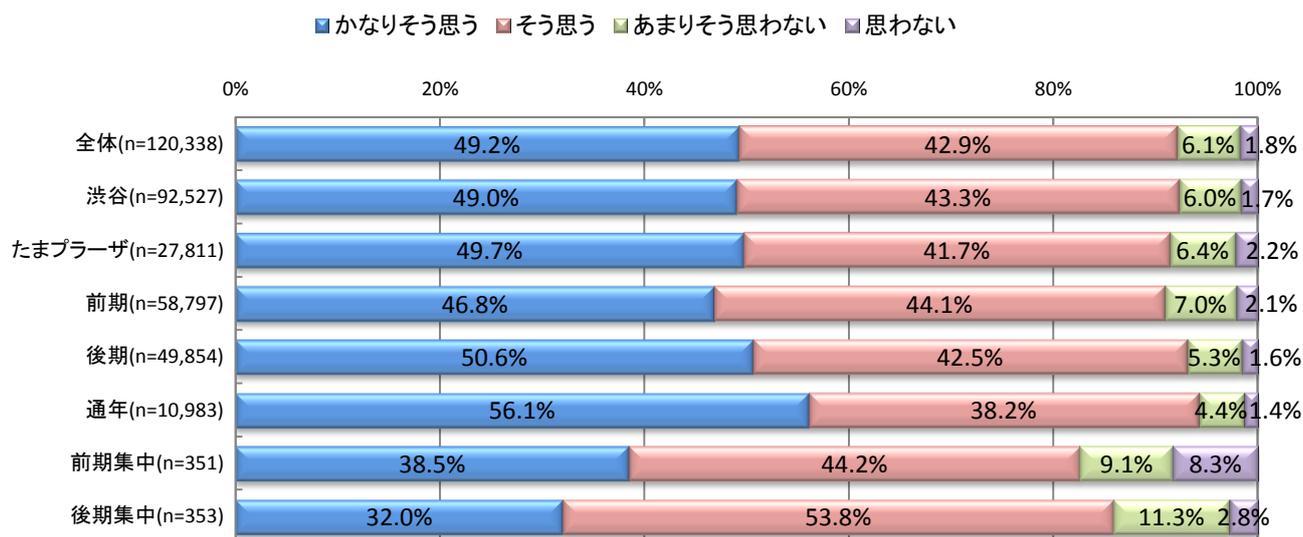
総合満足度を基軸として、回答者プロフィール（開講場所、開講時期、学部、学科、学年、クラス規模）と、授業科目の区分とのクロス集計を行った。

総合満足度(問H)について、「そう思う(計)」は全体で92.1%(前年比+0.3)であった。

### 1. 開講場所・開講時期別

開講キャンパスによる、大きな差異はみられなかった。

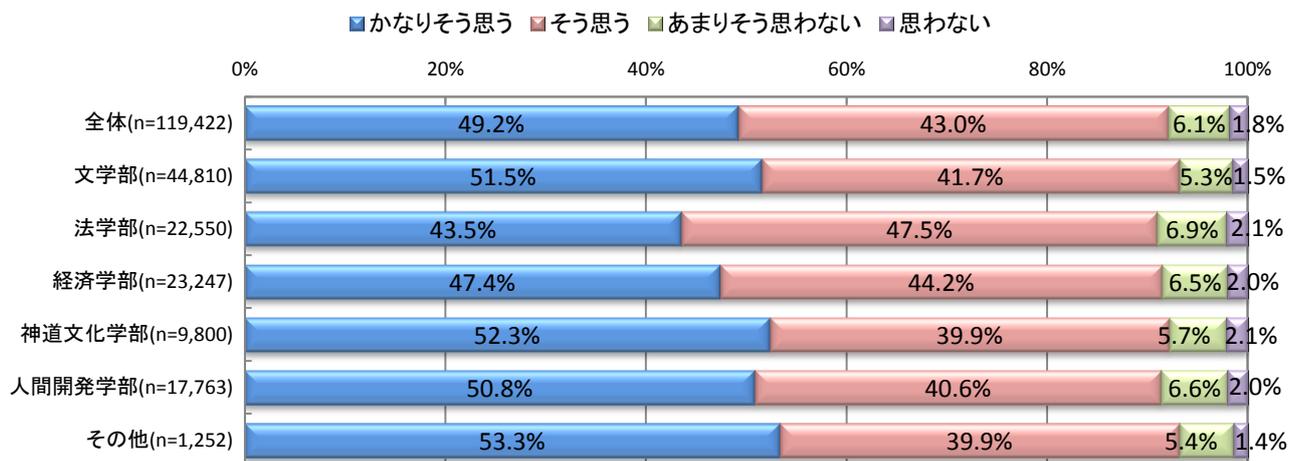
開講時期については、半期科目及び通年科目はいずれも「そう思う(計)」が90%を超えている。通年科目では、「かなりそう思う」が56.1%で、過半数が高い満足度を示している。一方、半期集中科目は前期・後期ともにスコアが低かった。



### 2. 学部（回答者所属学部）別

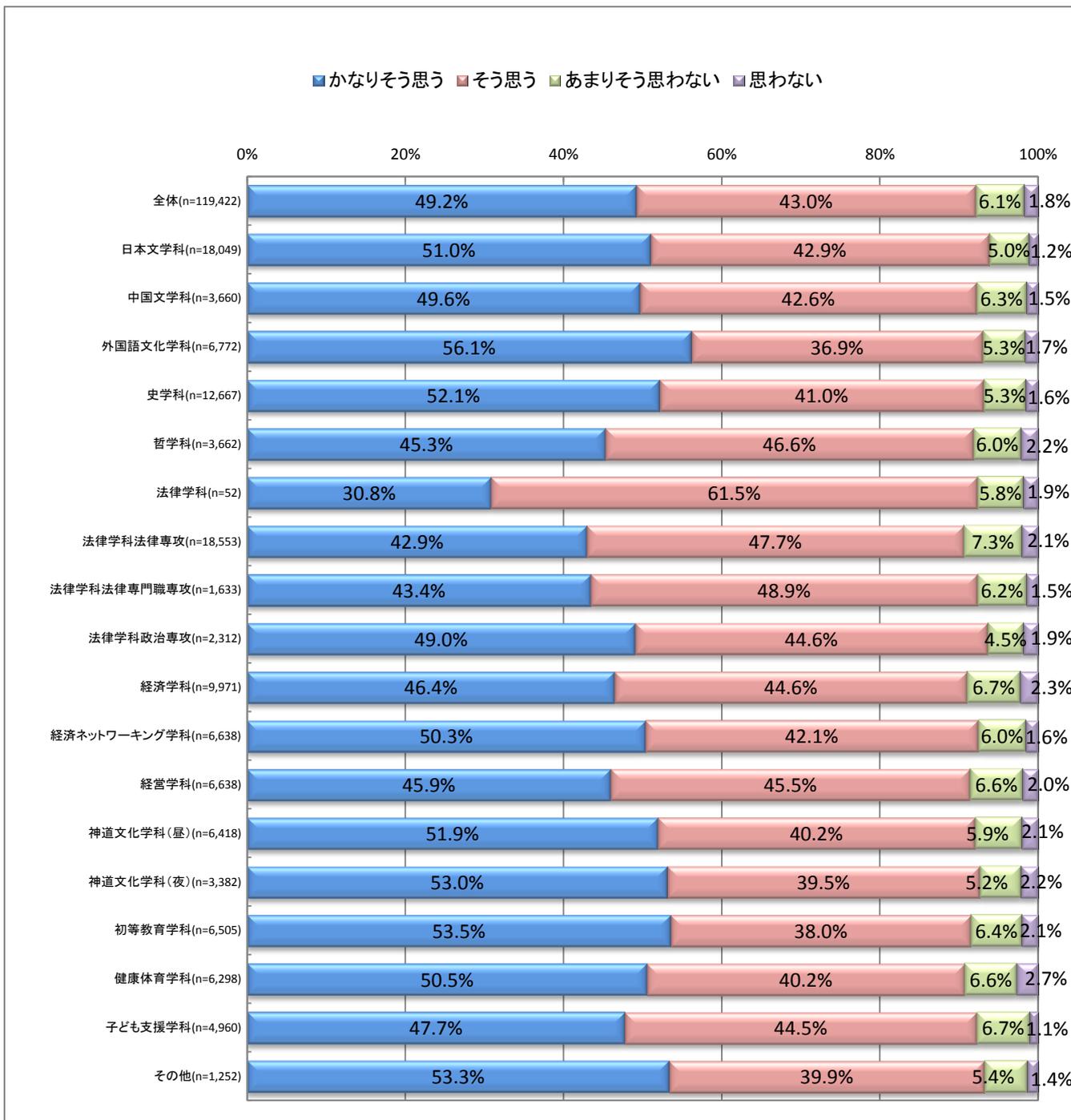
総合満足度(問H)について、学部による大きな差異はみられなかった。

いずれの学部も「そう思う(計)」は、90%を超えている。



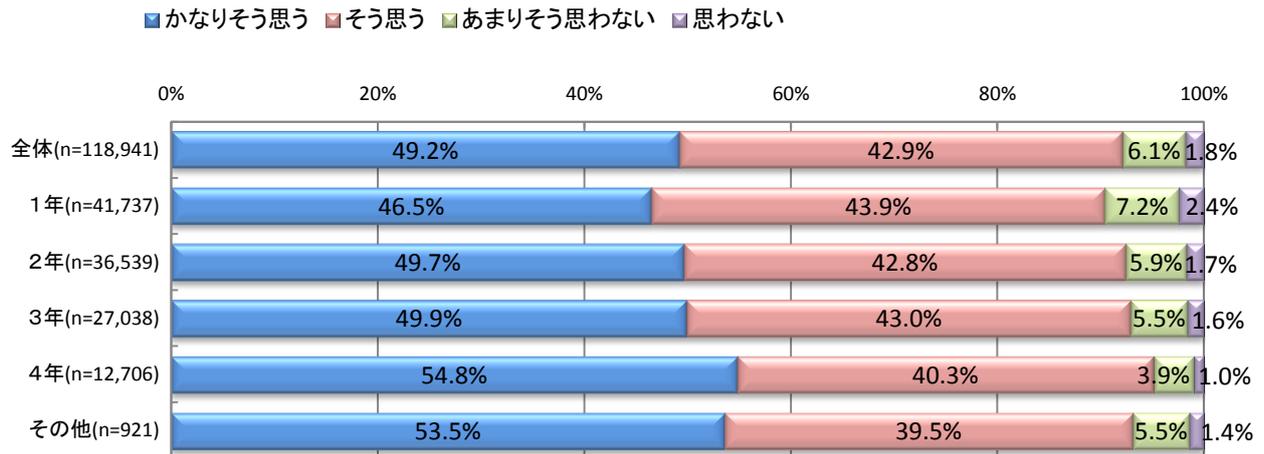
### 3. 学科（回答者所属学科）別

総合満足度(問H)について、学科別に集計した。「そう思う(計)」の結果には大きな差はなかったが、「かなりそう思う」割合は、学科によりややばらつきがみられる。



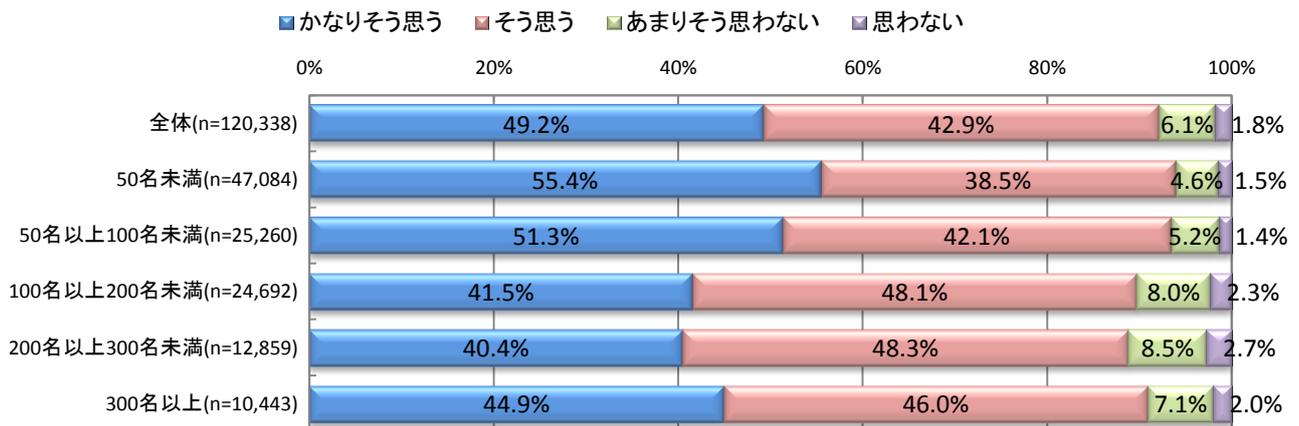
#### 4. 学年別

総合満足度(問H)について、学年別に集計した。「そう思う(計)」は「4年生」が95.1%と最も高く、「1年生」が90.4%と最も低かった。学年が進むにつれ、理解度と同様に満足度も、やや上昇する傾向にある。



#### 5. クラス規模別

全体理解度と同様、「50名未満」のクラス規模で、「そう思う(計)」が93.9%と、最も高い割合を示している。クラス規模が大きくなるほど、満足度は下がる傾向にあるが、「50名以上100名未満」では、全体とほぼ同じ割合に下がり、クラス規模が100名を超えると横ばいとなっている。また300名を境にやや上昇している。



## 6. 科目（授業科目の区分）別

総合満足度(問H)について、授業科目の区分別に集計した。「そう思う(計)」が最も高い科目は、「別科必修」(98.5%)であり、最も低い科目は「社会教育主事課程」(74.0%)であった。その差は24.5ポイントとなっている。

理解度と同様に満足度も、科目によって満足度のばらつきが生じている。

全般的に理解度のスコアと同じ傾向がみられる。

